春水作

假名讀八犬傳

八

へ 13
3701
8

假名讀
八犬傳
第八編
文渓堂

春水作
國芳画

かなよみ
八犬傳
十なへん

春水作
國芳画

文渓堂梓

門 へ13
號 3701
巻 8

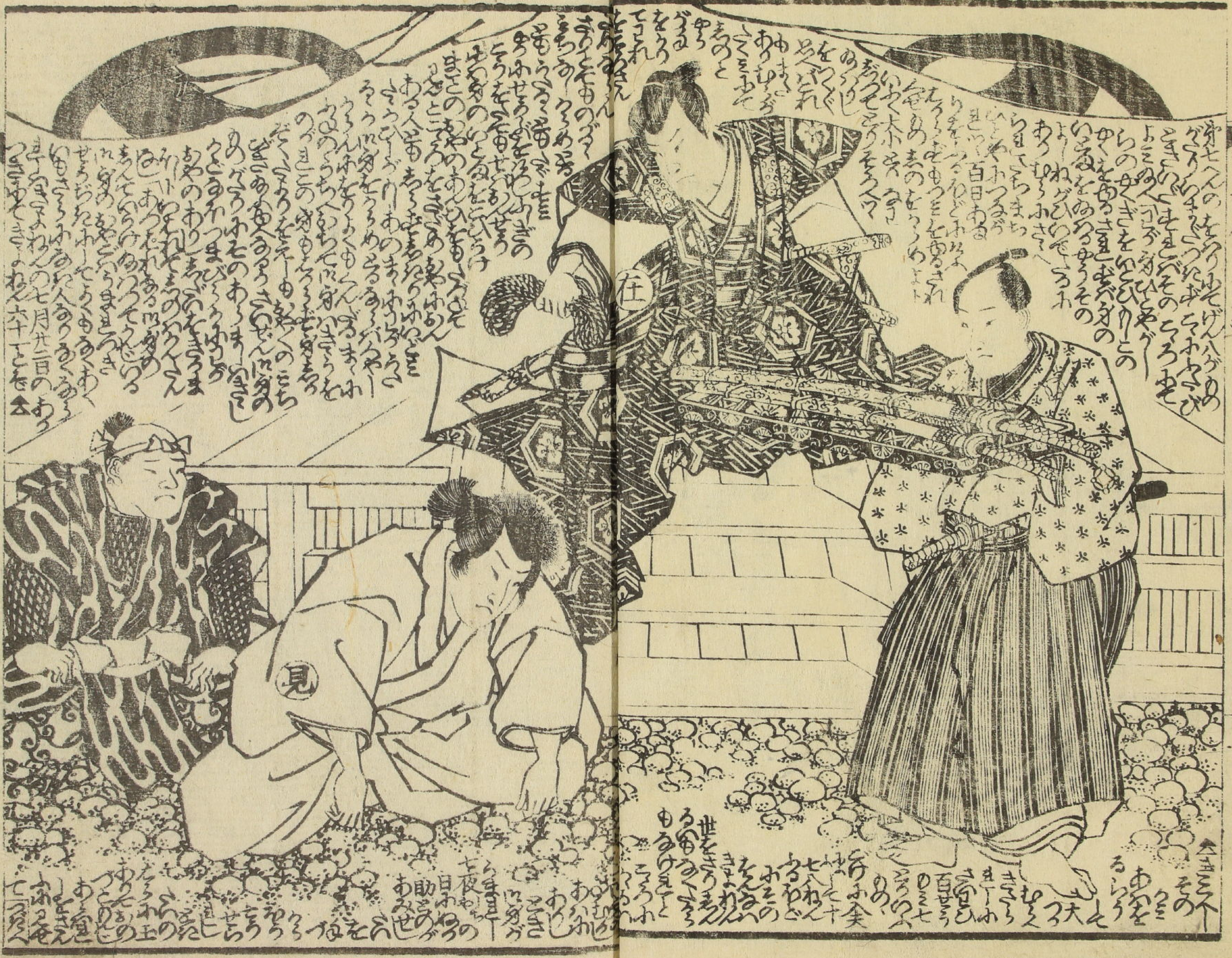
春水作
国芳画
八編上

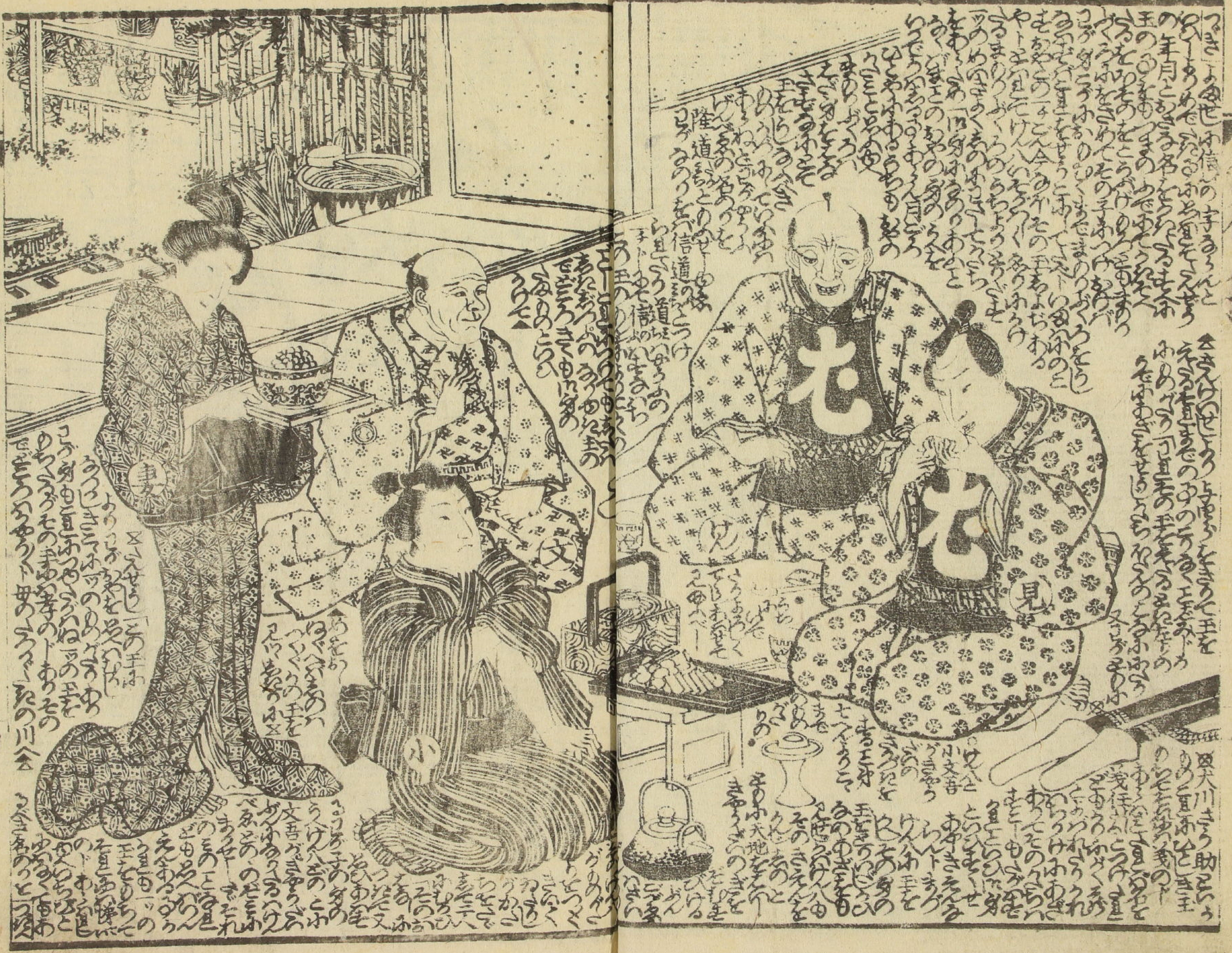
かなよみ八犬でん
八編上
春水作
國芳画
八編下

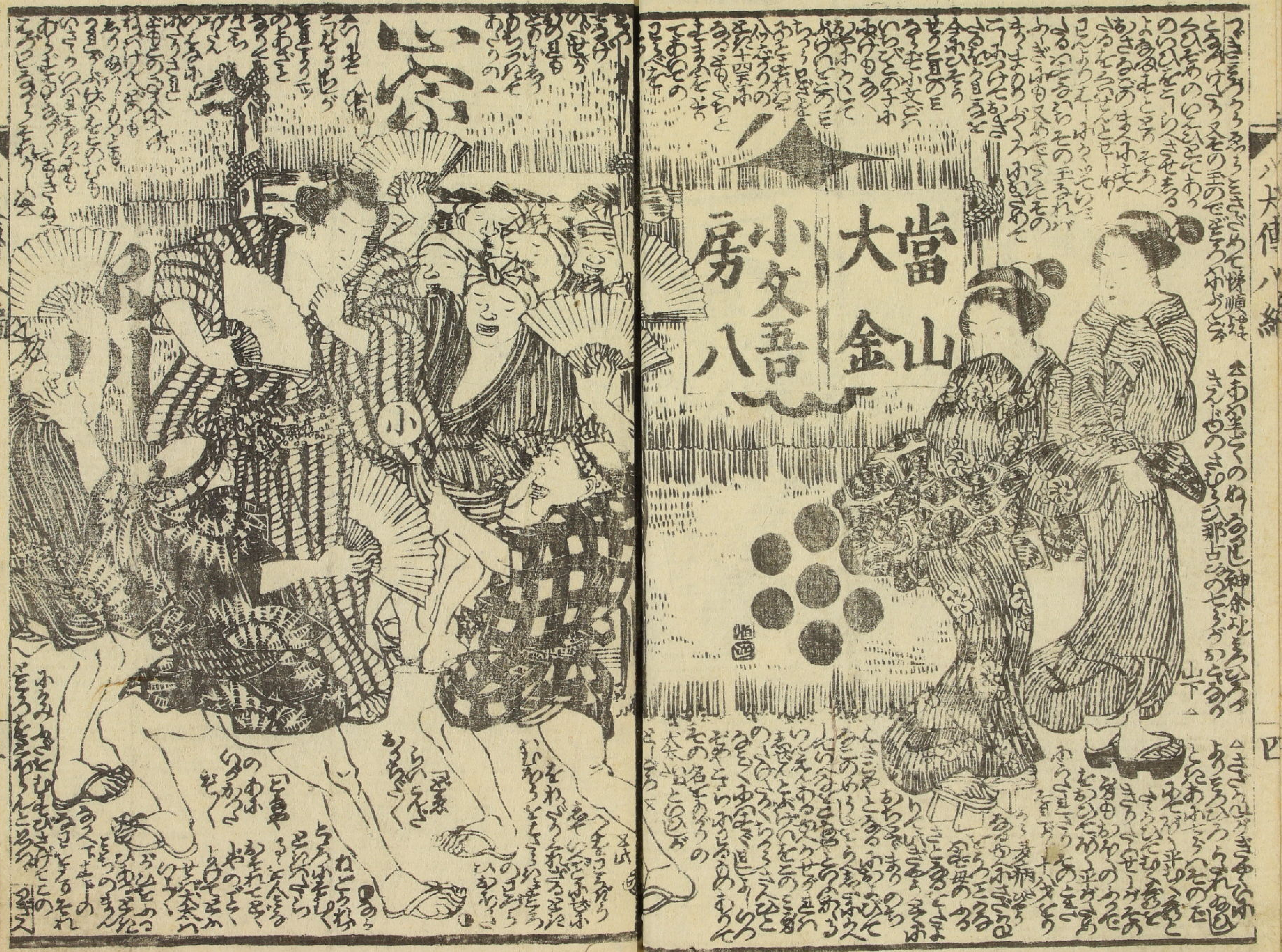
大きなる食言を吐を。世俗に梭尾を吹といへり。ゆゑある其理なきにあらずぞ。
那梭尾貝と云へるものハ海にあるハ声を発せず。その肉を去り殻をと
め死物になりて吹るゝときハ。其声数丁の外まで聞ゆ。嘘ハもとより実とならぬ
ものなれバ。宜此螺に似たるものなり。附会して斯ハ言ならん。復その程よりぬ大
なるを。稗史小説にまづなかし。さなりとて千里に鳴る介バ。這書の
原傳などの如きも。ほらならぬ大将軍の余。細螺の才をもあらはれど。第七
編の表紙の裏に太きなる梭尾を画せり。中に序言を出せしハ。かの
大朱達念王坊が。螺に因みて表をものから。又是食言の看板に偽
りありたるを見せんが為なり。蕪くハ四方の看官。やゝ憂顧をさな
ゝても。梭尾の中なる序言ハ。如何なる灰吹の中に蛇が出ちんならん

嘉永三歳庚戌春刻

大先達
念玉
暴風の
舵九郎
修験道
観得
小文吾
八房
戸山の
妙真

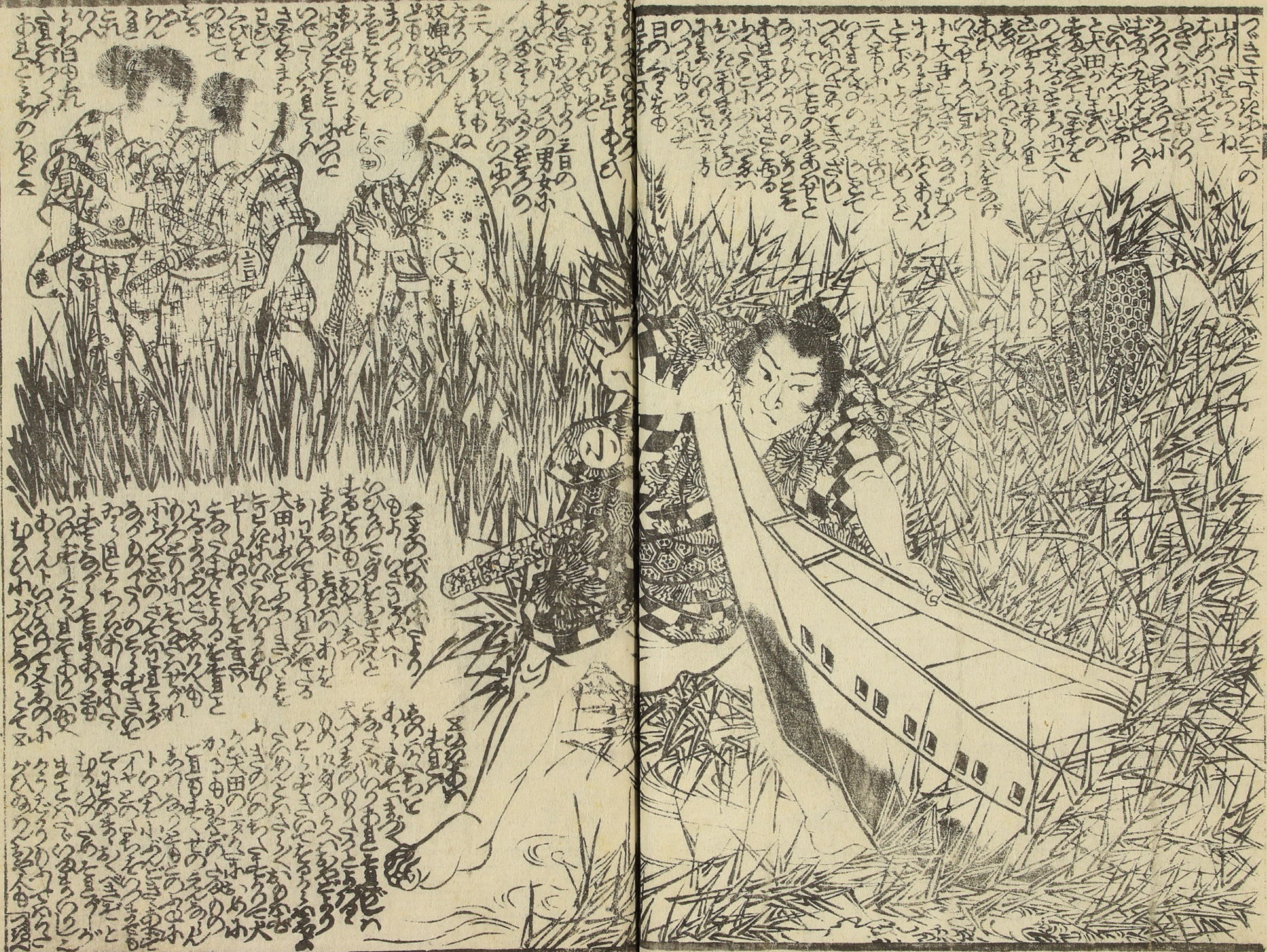

在
見


七
七
見
文
小


當山
大金
小文吾
八房
小
山下

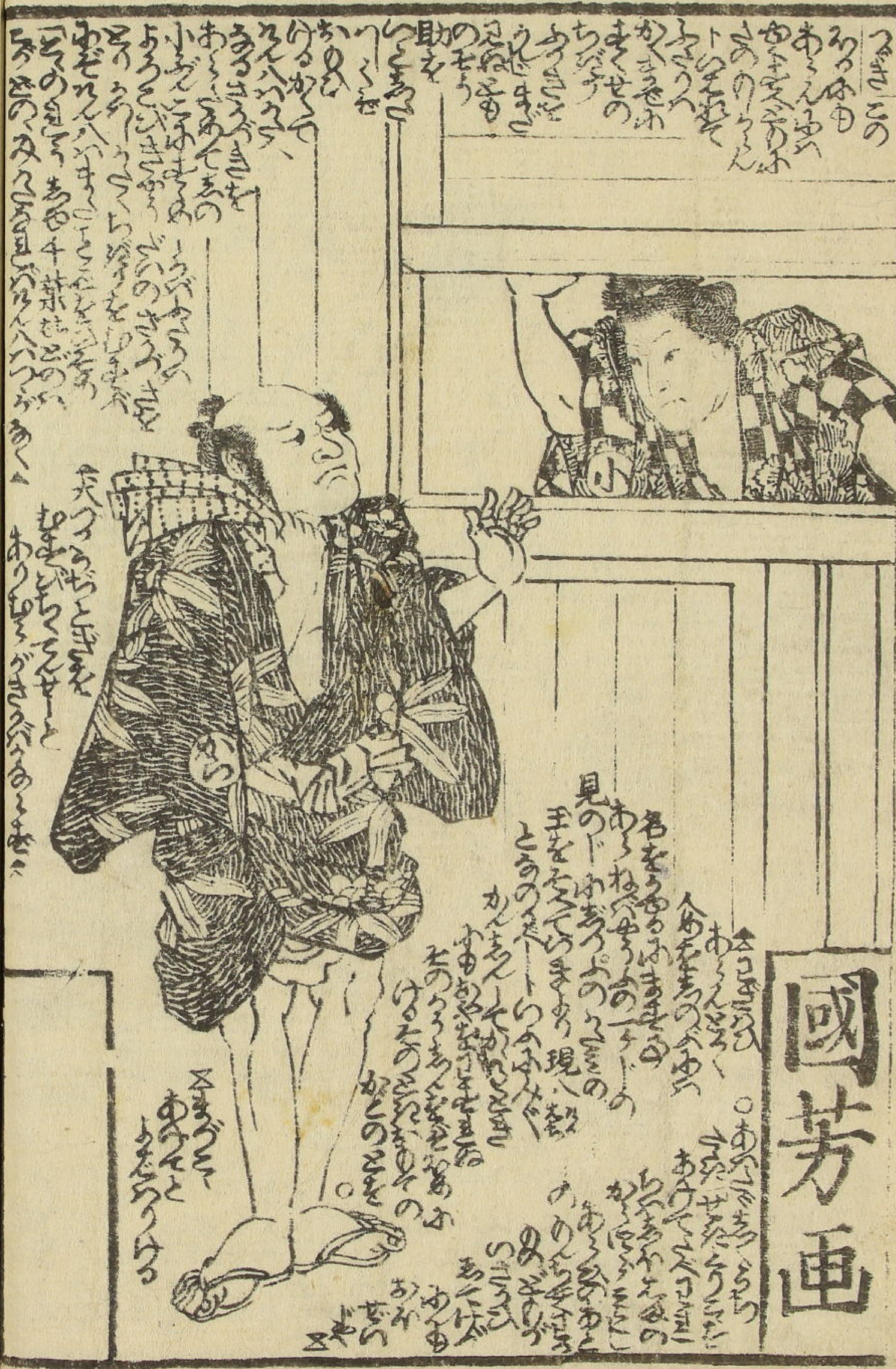
くせもの
小

[illegible]


文
信
小

[illegible]

くせもの



朝霞楼芳幾画

狼褌黄金鯱

三編讀切

瀬川如皐
山々亭有人
惠齋芳幾
梅素玄魚
松湖交來
假名垣魯文
河竹其水
合作

名響の義賊ハ楠木金輔
名誉の孝女ハ枝豆於市

一對男の縁ふ因て戯作劇場を一様ふ竹林ならぬ七軒人が一回五葉を持きりの合作全備の三編冊 [初編]初丁ヨリ五丁め迄其水作 同六丁めヨリ十丁め迄有人作 同十一丁めヨリ十五丁め迄交來作 同十六丁めヨリ廿丁尾迄如皐作 [二編]初丁ヨリ五丁め迄魯文作 同六丁めヨリ十丁め迄芳幾作 同十一丁めヨリ十五丁め迄其水 同十六丁めヨリ廿丁尾迄有人 [三編]初丁ヨリ五丁め迄玄魚作 同六丁めヨリ十丁め迄如皐 同十一丁めヨリ十五丁め迄魯文 同十六丁めヨリ廿丁尾迄其水 如斯ふ持場抜定め一旦ふ筆力をほくし写當藏板のちらぬひ同様御高評を希ふ

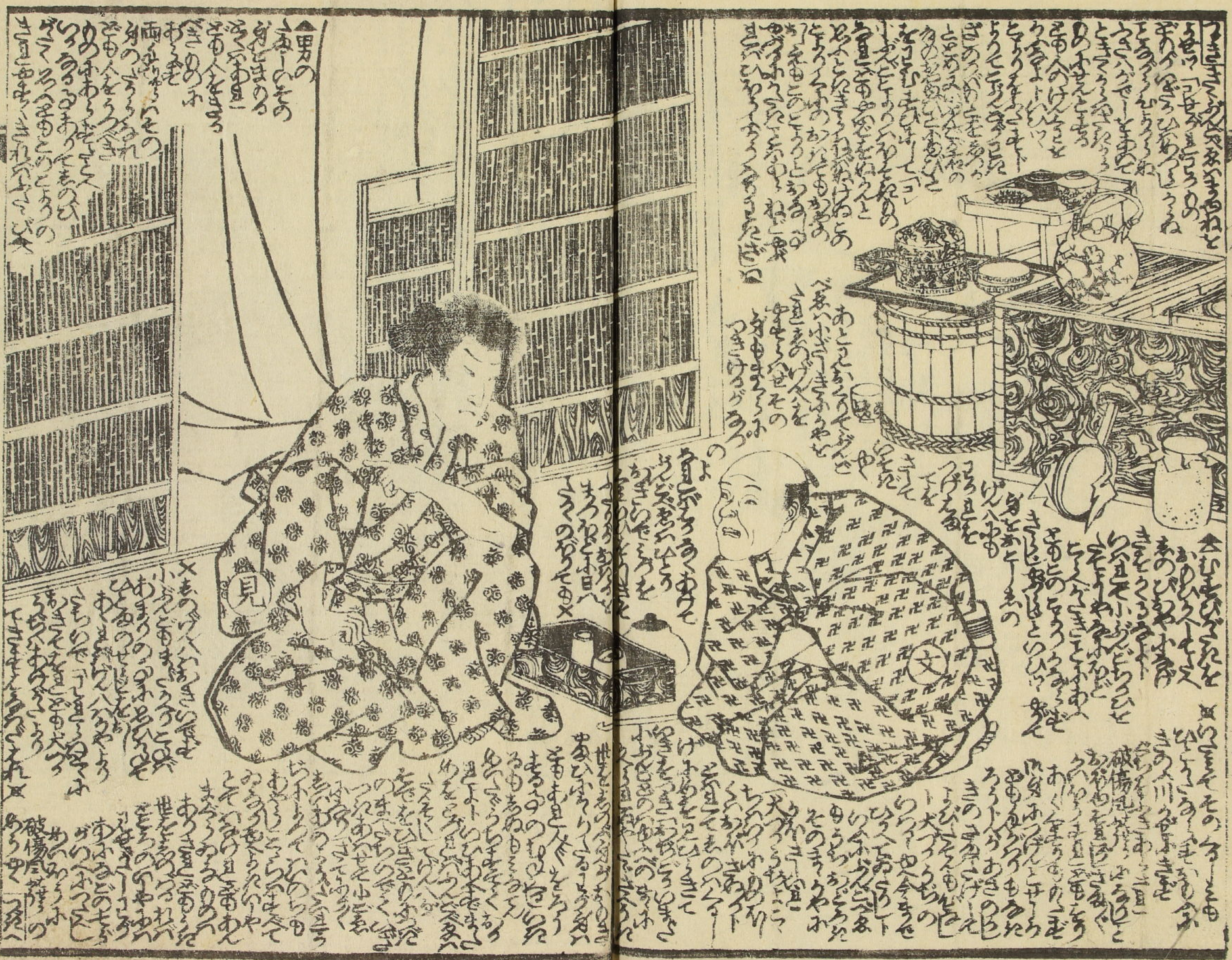
地本草紙問屋
江戸深川佐賀町
廣岡屋幸助梓

かなよみ八犬傳 七編

世に寄宿虫といふ虫あり一名をカニモリ又ハガウナといふその形蟹に似て細く毎にその身の栖を定めず或ハ細螺或ハ蝶甲螺など惣じて貝の虚売にやどりて自己とす足りとせり仍て其名をやどかりといふ事ぞ是も亦此遺に筆を採てかのやどかりのわざにあら稗史六編の趣向を用ひて言詞に余りて紙員尽けれバ然ばこの七編に序文の居所を借用せんと言ひて序文ハ詮方なし謂所虎をかゝれて母屋を取らしあつかひまかせて素より叙言ハあらで益なし斯いふもかる法螺の中殻須臾やどかりぞとて大言嘘を吹出さんとまづ細かることを書けが

嘉永己酉
孟春新鐫　春水誌

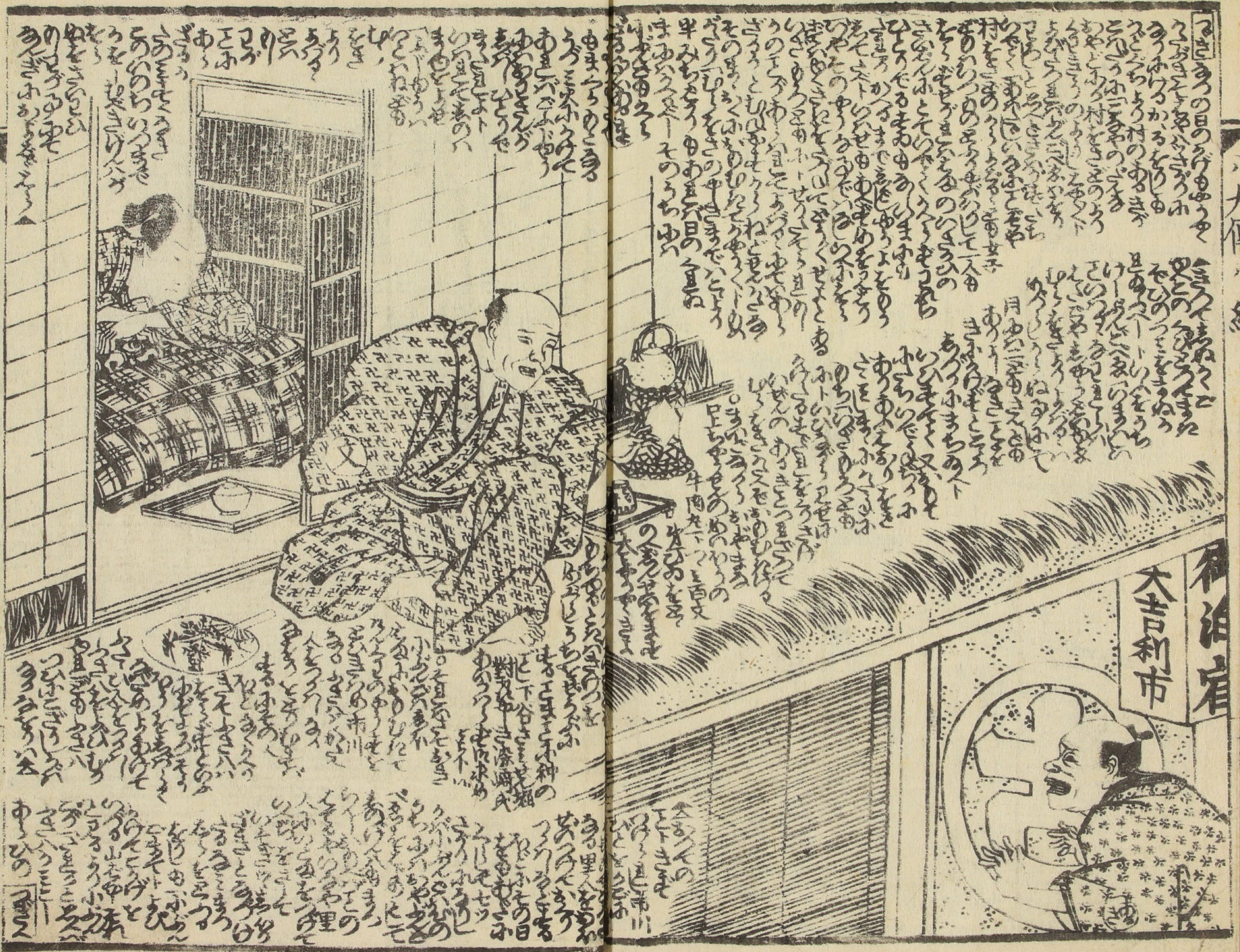
画 国芳画
文溪堂
董仙書


見
文

泊宿
吉利市

つぎきうの日のあけがたゆう[illegible]

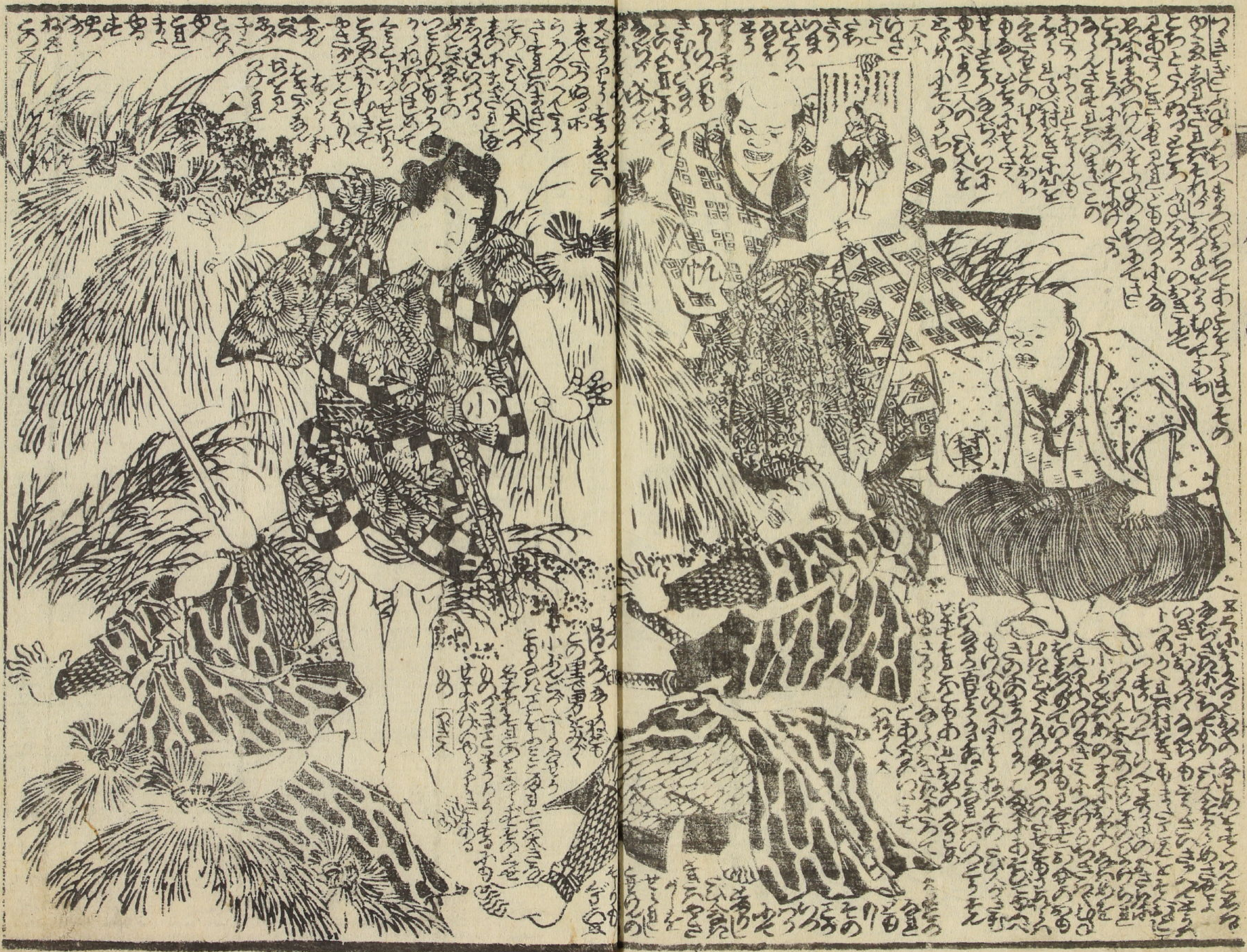
[illegible]



牛肉九十一つ 三百文

[illegible]

観
文



八和田定宿
成田講中
来状扣

白那屋

那屋
水

[illegible]

浄書 金交

志らぬひ譚 五拾四編ヨリ六十編マデ 柳亭種彦作 一恵齋芳幾画

両面織花田物語 初編ヨリ五編近刻 同作 同画

假名讀八犬傳 三十一編ヨリ三十五編マデ 假名垣魯文録 朝霞樓芳幾画

古今俳優似顔大全 故豊國翁筆 大錦百三番續

太平記英勇傳 中錦百番續 山々亭有人記 一恵齋芳幾圖